

社会人基礎力を高める授業の実践

ー産学連携PBL授業「アクティブラーニング」の取組ー

藤井文 武
平尾元 彦

要旨

社会人基礎力の育成を目指した産学連携PBL授業「アクティブラーニング」を、山口県内7社の協力を得て実施した。各社に出向いて「社会人とは？」に関するインタビューを実行し、そこで得た素材をもとにオリジナルのホームページを作成・公開するというプロジェクト課題に、学生4～5名のチームで取り組んだ。授業後の社会人基礎力の診断値は当初の値を上回り、学生の行動にも変容が観察されるなど、授業の効果が見られた。一方で、①低学年PBLにおける課題の設定、②課題実施に向けての指導体制、③他者からのフィードバックに関する課題が指摘された。

キーワード

社会人基礎力 産学連携 PBL アクティブラーニング

1 はじめに

大学生の社会人としての力を育成していくために、大学教育においても産業界との連携した取り組みがなされている。代表的なものにインターンシップ・コーオプ教育があるが、これは職場に出向いて就業を体験することで、大学で学んだことを実践するとともに、仕事とは何か、働くとはどういうことかをリアルに体感する学習機会であり、今では多くの大学生が経験する産学連携型の教育手法のひとつとなっている。

もうひとつ近年注目されるものとして、産学連携PBL (Project Based Learning) 授業がある。与えられた課題を解決していく中で能力の育成を目指す課題解決型学習であり、企業や官公庁等の協力のもとに実行する。そこでは、学生自身が企業等の担当者の協力とファシリテーションの下で主体的・実践的に課題解決に取り組み、その過程でさまざまな問題解決手法・プレゼンテーション能

力・問題把握力・問題分析力などを身につけ、課題解決・企画立案等の実践的能力を獲得することを目指す。授業では、プロジェクト課題の遂行を支援するために課題解決のため必要な理論・セオリーと実技・スキルを教授し、学生はこれを実践の場で確認するプロセスを踏む。座学・演習ではなかなか伝えられない社会人基礎力について、社会人の方々の共同作業のなかで能力育成を目指すものである。

山口大学では、共通教育科目のなかに学部横断・低学年中心のPBL授業を設け、社会人基礎力の育成に取り組んできた。本稿ではこの取り組みを紹介するとともに、実践から得られたPBL教育の課題を明らかにしたい。

2 授業「アクティブラーニング」の概要

2.1 授業の目的

共通教育科目の総合教養A（低学年対象・

学際領域)に位置づけられる「アクティブラーニング」は、高学年次で学習する専門知識を実践の場で展開・活用するための普遍的基礎能力の育成と意識付けに目的を絞って平成19年度に新規開講した科目である。シラバスに記載される授業の概要ならびに一般目標は以下のとおりである。この授業は「自分を成長させる技術の習得」を目標に、特に学生が自ら学び成長する態度を植え付けることができるようカリキュラムを設計した。

開講初年度の平成19年度は、教授した技術を授業内ワークショップにより同世代の学生を相手に実践し身につける形で授業が実施されたが、平成20年度は、経済産業省の社会人基礎力育成プロジェクト¹⁾に採択されたことを受け、社会人基礎力を「成長」の能力指標として位置づけ、履修生に教授した自己成長の技法を産学連携して実施するプロジェクト課題の場で実践させることで、学生の能力強化を目指す授業へと実施内容を変更した。社会人基礎力ではチームで働く力が重視されることから、学生をチーム分けしてプロジェクトに取り組みさせ、学生はプロジェクトの遂行に伴い発生する様々な問題をチームとして解決しながら与えられた課題の完遂を目指すことになる。

プロジェクト課題の内容は、より多くの受講生に授業開設の目標に到達させる上での重

要な設計パラメータである。本授業は低学年次学生向けの科目であり、かつ共通教育科目であって複数の学部学生が混在することを考えると、特定の専門分野に絞った課題とすることは難しい。また、この科目は社会人基礎力育成の端緒付けを行うことを目的としているため、授業受講により得られるものが一過性のもので終わってしまっは意味が無いと考えた。履修生が今後の学生生活、より長いスパンでは人生を有意義に組み立てていく能力を獲得する意識付けを行うに当たっては、授業の中で大学生活の理想像を形成させ、社会人となるにあたって到達しておくべきレベルを認識させることが効果的であろうとの仮説の下、授業で学生に課すプロジェクト課題を「企業インタビューと、読者にキャリア形成に関する思考を促すホームページの作成」とした。履修生は協力企業の社会人に対して「働くとはどういうことか?」「社会に出るとはどういうことか?」をより聞き出してくるよう指示され、実際に企業を訪ねてインタビューを実行した。この事前準備として担当教員は協力企業の担当者に課題の趣旨を説明し、学生からの取材対応に当たっては彼らの行動規範形成にプラスになるような示唆を、自らの経験に照らしつつ与えて頂くようお願いした。これにより教員が学生生活のあるべき姿を語る以上に現実味を帯びた形で学生に

総合教養A「アクティブラーニング」 授業の概要と一般目標

●授業の概要

変革の時代において必要なのは、既存の知識や状態に縛られることなく、常に上を目指し、「進化」し続ける力である。本コースでは、生涯に渡って使い続けることができる「自己成長の技術」を指導する。大学内で授業を受ける時に役立つ「学ぶ技術」から、大学外での活動を通してのキャリアアップの方法、ひいては卒業後、社会に出てから役立つ「ビジネス向上力」まで、いわゆる「生きる力」につながる人間力の向上を目指す。

●授業一般目標

1. キャリアアップ編：自分の人生を計画的に向上させていく技法を習得する。
2. ビジネス編：社会に出て通用するビジネス力を習得する。
3. スクール編：学校で役立つ学ぶ技術を習得する。

理解されることが期待される。

一方、教員は履修生に対して、目標とする理想像を設定し、それに向って何をすべきかを考えるよう誘導した。履修生は、協力各社の社会人の方々との対話のなかから社会人として必要な力をとらえ、自らの目標を設定し、それに向けて大学生活をどのように過ごすべきかを考える機会を与えることを目指している。学生の思考の結果として形成される目標とするところは、遠く高いかもしれない。この事実に関して、一気呵成に目標到達することは非現実的であることを学生に語りかけ、目指すべき理想像に向けて梯子をのぼるように少しずつ歩いていくことができればそれで良いという内容の話を行った。これらの働きかけの集大成として、他者が読むための文章として表現させるホームページ作成を課すことで、彼らの経験や思考を整理させ、より高次かつ普遍的な価値ある知・体験

として履修生の中に定着させる効果も狙った。また、学生の「自律的・段階的能力強化」を支援するため、授業の中で自己目標管理システムCHECK-MANIFESTO-ACTION ループを利用し、後述する社会人基礎力の診断にはここで開発した尺度を用いた²⁾。

2.2 実施体制

この授業は、山口大学産学公連携・イノベーション推進機構のイノベーション人材育成支援室が開講するもので、同機構の客員教授・羽根拓也（株式会社アクティブラーニング代表取締役）および同准教授（イノベーション人材育成支援室長）・藤井文武、大学教育機構教授・平尾元彦が担当し、地元の協力企業の参画、ならびに、アクティブラーニング社の協力により実施をした。

平成20年度講義におけるプロジェクト課題への協力企業は以下の7社である（五十音

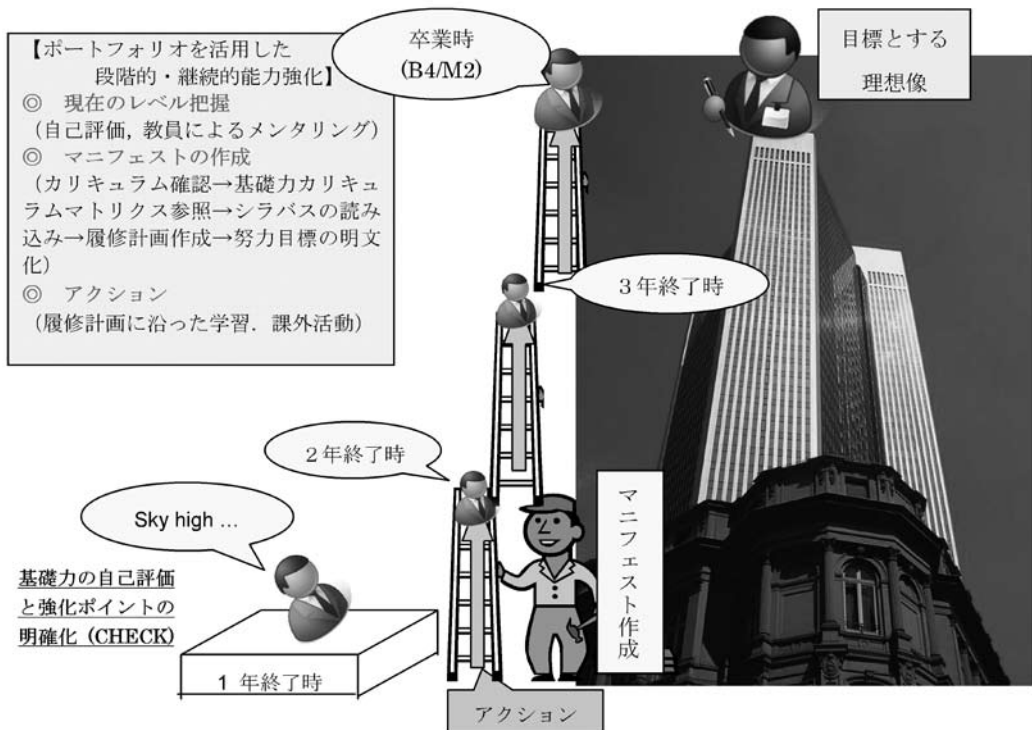


図1 社会人基礎力の段階的成長モデル

順)。

宇部興産株式会社 (化学メーカー)
株式会社宇部情報システム
(システム開発)
エコマス株式会社 (システム開発)
エルクホームズ株式会社
(住宅メーカー)
株式会社ケー・アール・ワイ
サービスステーション (広告業)
マツダ株式会社防府工場
(自動車メーカー)
株式会社山口銀行 (銀行業)

2.3 プロジェクト課題

今回、学生に課した課題は、企業インタビューを通じた「読者にキャリアに関する思考を促すホームページの作成」である。ここで言う読者とは、彼・彼女らと同じ山口大学の学生を想定し、完成したものは公開して見ってもらうことを前提とした。

まず、学部・学年が混在するように教員がチーム編成を行った。4～5名のメンバーからなる8チーム(班)が編成され、インタビュー取材に行くことを指示した。取材では「働くとは?」「社会に出るとは?」「学生である今のうちにやっておくとよいこと」「社会人基礎力の必要性」などについて質問する中で「ホームページの作成に当たり必要となる情報を対応してくださる方から引き出すこと」を具体的なアクションとして示したが、ここに書いた以外の質問項目や質問の言葉については各班で検討の上で取材に行くこととして、指示やヒントを与えなかった。取材で得られた情報と、社会人の方とのインタラクションの機会を通じて得た経験、感じたことを材料に、「読むと、読み手が自分のキャリアについて考えることを促されるような」ホームページを作成することを目指した。

2.4 期待する学習効果

この授業で期待する学習効果として、以下の4点を考えた。

- ① 自らの将来像である社会人の方と対話することで、学生の中に身につけておくべき能力や態度に関するイメージを掴むこと。特に、社会人基礎力について、その重要性を理解し日頃から能力を強化する意識を持つこと。
- ② 社会人の方のお話を基に現在の自分を省みて、修正すべき点はないか、改善できることはないか自省し、今後の改善につなげること。
- ③ 社会人の方とのインタラクションにより得られた刺激を、自らの主体的な活動による大学生活全般の向上につなげること。特に、専門教育課程で教授される事になる知識習得の重要性に気づき、自らの向学意識を高めること。
- ④ 1年生前期に開設される情報教育科目「情報セキュリティ・モラル」および「情報処理演習」で教授された知識を踏まえ、かつ全学生に購入が推奨されているノートパソコンを活用し、チーム内での情報共有を行うとともにホームページの作成を行うこと。

すなわち、実際に職場を訪問してはじめて出会う社会人の方々にインタビューすることによる「前に踏み出す力」、取材という行動・作品として仕上げる活動を通じた「考え抜く力」、この授業ではじめて出会う仲間との共同作業による「チームで働く力」の育成を期待するものである。

2.5 協力企業の役割

協力いただく7社には、授業が始まる前に集まっていたいただき、その役割について意思

統一をはかった。学生の取材対応について依頼したことは以下の点である。あわせて取材後のフィードバックおよび必要に応じて再取材をお願いした。

3 授業の実施

上記フレームにて授業を設計し、平成20年度後期に実施した。授業の流れおよび各回の活動、学生の様子は以下のとおりである。授業には、プロジェクト課題に取り組むための各種技術を学ぶコマを取り入れている。学生たちは、相互成長の技術、情報伝達の技術、集合知作成のトレーニングなどを通じてスキルを学び、プロジェクト課題の遂行に活かして行った。また、期間中3回、社会人基礎力の自己診断・評価を実施し、マニフェストを書いて自分の目標設定もあわせて行った。ここには、山口大学が開発したCHECK-MANIFESTO-ACTION ループの仕組みを用いている。最終的にはすべての班が、企業の採用担当者を前に成果を報告し、ホームページを


作成して公開した³⁾。

4 授業の効果

4.1 全体評価

授業実施にあたり事前（10月）・事中（12月）・事後（1月）に社会人基礎力診断値の測定を行った。社会人基礎力は12の項目からなり、各項目1～9点（高得点＝社会人基礎力が身につけている）で評価される。

表2は、アクティブラーニング履修生30名中（事前事後の社会人基礎力診断値のうちどちらかが測定されていない6名を除いている）、各基礎力の測定値が上昇した人数を表している。すべての要素で基礎力の平均値は上昇しており、規律性、働きかけ力、発信力、創造力といった要素の上昇幅が大きい。チームでの作業を通じて、また、アイデアを出さないと次に進めない状況に追い込まれた経験が影響したこと、ワークショップをベースにした授業で発信力・傾聴力を中心に徐々に自らを言葉にして表現することに慣れて



取材対応においてご留意頂きたい事項

- 今回の産学連携PBLの目的
 - 入学間もない1年次学生を主対象として、企業で働かれる皆様を取材させて頂くことで、以下のことを体得してほしい
 - 「社会に出る」とはどういうことなのか？彼らなりの理解を形成してほしい。
 - これをもって、大学卒業時点で自らが到達すべきゴールイメージを自らの中に形成してほしい。
 - このゴールイメージと、自らの現状の差を、残る大学生活において一歩ずつ埋める意思を形成してほしい。

- 従って企業様からは、以下のような示唆を頂きたい
 - 大学生である期間に社会人基礎力を育成することが重要であること
 - 実際の企業の現場においては大学で学ぶ知識が「身に付いている」ことが重要であること
 - （「じゃあどうすれば良いのか？」を最終的に考えるのは学生だが）会話の流れの中でその思考を誘うようなお言葉を頂けるとありがたいです。

図2 取材対応における協力企業への依頼事項

表1 授業中の活動と学生の反応

日程	授業中の活動	学生の反応
第1回 (10/3)	イントロダクション (人間力の時代へ) PBL 課題の概要説明	ワークショップに対する反応は良好。一方でプロジェクト課題の説明については反応ほとんどなし。
第2回 (10/10)	PBL 課題の詳細説明 (授業設計の意図, 期待する受講態度, 授業における目的意識形成のポイント) 社会人基礎力の意味と重要性 社会人基礎力の自己評価 (事前) 自己分析シートの作成	<ul style="list-style-type: none"> ・社会人基礎力の解説と自己評価については特に問題なし。 ・PBL 詳細説明については, 前回授業より食いつきが良かった。ただし「これをやることで自己の成長について正面から向き合おう」と言って話した内容は1~2年生には難しすぎ, 言葉が頭を素通りした感じ。
第3回 (10/17)	プロジェクト課題チーム分け発表 チームにおける役割分担の決定と連絡体制確立→授業外ミーティングを指示 目標設定の技術: マニフェスト授業中マニフェストの作成	<ul style="list-style-type: none"> ・チームも決まり, 学生にも多少高揚感が見られた。役割分担決定指示も納得の様子。 ・マニフェストについては, 書き方が分からず苦戦の様子。
第4回 (10/24)	相互成長の原理原則・C2 理論 取材希望先企業の話し合いを指示 →授業外	<ul style="list-style-type: none"> ・この日はワークショップのみ。遠隔講義システムを活用した東京からの遠隔授業であり, いつもと異なる状況の効果か, 集中度も高い様子。 ・取材先について話し合いを指示したが, 授業後日程調整のことについて話し合う様子も見られ, 徐々にチーム感が形成されつつある様子。
第5回 (10/31)	第3回に作成したマニフェストの修正FB 取材先伝達・取材時の注意事項伝達・取材アポ取り指示 ホームページ作成ガイドラインの提示 今後のスケジュール・提出期限などの確認	<ul style="list-style-type: none"> ・取材先が決まり, モチベーションアップしている様子をはっきりとわかる学生も見られた。 ・マニフェストの修正FBは, 内容に具体性を欠いているか, 授業で行う活動との関係が不明瞭なものについてのもの。何が問題なのかを説明した上で返却修正作業をさせたので, 修正内容はこちらの意図通りである。 ・いろいろやれと言われて指示もたくさん飛んできて取りこぼす者 (今日中に提出を指示したのに出さないで帰るなど) も現れ始めた。
第6回 (11/7)	相互成長の技術-アウトバック	この日はワークショップのみ。チームが決めたため, これ以降ほぼ全てのグループワークはチームで行うことになったが, チーム内での親しみ向上に効果を発揮した。
第7回 第8回 2コマ連続開講 (11/8)	情報伝達の技術-チームワーク 集合知作成のトレーニング インタビュー取材のトレーニング	<ul style="list-style-type: none"> ・この日もグループワーク中心だったが, インタビューシミュレーションをしたことで自分たちの準備不足を痛感した様子。 ・グループ活動がうまく回らないことについて相談1件あり, 助言対応した。
授業休止期間 (11/9~11/27)	企業の訪問取材実行 ホームページ記事案 (第1次) 作成	
第9回 (11/28)	ホームページ記事案 (第1次) 提出 取材前後で自分に起きた変化の可視化	<ul style="list-style-type: none"> ・取材直後の授業。取材経験を基に考えさせたため, 問いかけにもすぐに答えが出てくるし, グル

	(before/after) 社会人と自分の差の可視化 成長の数学的説明－補間と外挿 企業の方からの取材フィードバックシート の返却と、修正点の共有化 社会人基礎力の自己評価（事中）	ーブワークもスムーズに進む。 ・第2回授業で説明した「成長」について、より踏み込んで説明を加えたにもかかわらず、理解度は今回の方が圧倒的に高い。教壇から見る学生もうなずきながら聞いている。ほぼ全ての学生がこちらを見ていて集中が切れない。経験に勝る学習はないと痛感。
第10回（12/5）	ホームページ原稿1次案の評価結果FB ホームページデザインについての suggestion ビジネスの原理とは 価値＝差異×理解	・順位付けがなされ、悲喜こもごもといった様子。 ・しかし、1位とされたチームも他のチームにもそろって厳しいフィードバック（ダメ出し）が待っていて、評価結果最下位のチームも含め多少ショックを受けた模様（表面上は苦笑い状態）。ただしこの厳しい評価を発奮材料にできる学生もあり、課題取り組みに関する主体性がこのあたりから目に見えて向上し始める。
第11回 第12回 2コマ連続開講 （12/6）	能動的学習態度の定着－LITE ビジネスの原理原則－3 フローホームページ内容についての suggestion ホームページ改善指示 → 授業外作業	・HPを何とか改善したいという気持ちが表面にあらわれてくるようになった。授業後に自分から相談や質問にやってくるようになった。 ・この回の順位発表以降、暫定最下位だったチーム（全1年生）に授業TAを専属的に貼り付けフォローさせることとした。
第13回（12/12）	ホームページ作成に関する相談対応（授業外での作業状況を踏まえた相談）	最終原稿提出期限が迫り、これまで主体的な取り組みが見えづらかったチームも自分の方から質問に来るなど様子に変化が見られた
第14回（12/19）	ホームページ作成と仕上げに関する相談対応（授業外での作業状況を踏まえた相談） ※当初は予備日として設定していたが、学生の課題完遂を支援する目的で開設	・すべてのチームが自分たちの目的に添い集中して作業している様子。 ・教員への質問は自分たちで行うべき判断や決定を教員任せにしてしまっているものもあった。本学の学生はこのような場合答えめいたものを提示してしまうと、それを鵜呑みにしてしまい意見のやり取りなく思考を停止させてしまう傾向があるため、答えは与えず判断の材料や視点を話して聞かせることに留めたが、後に出来上がったHPを見て、言ったことの意味がわかっていないことが判明したケースもあった。
第15回（1/9）	最終発表に向けて－発表資料の構成について 発表資料作成 → 授業外作業	・この日の夜、徹夜作業となったチームが多発。理由は発表のガイドラインをこの段階で与えたためである。 ・徹夜した努力と気持ちは買うが、何を持って評価するかは12月中に提示してあったため、もっと早く自分たちで発表をどうするか考え作業できたはず。
第16回 第17回 2コマ連続開講 （1/10）	取り組み成果の発表会（企業担当者参加）表彰式・講評 社会人基礎力の自己評価（事後） 学生による授業評価のフィードバック	努力の甲斐あって、発表は全チーム最低限のレベルをクリアしていた。中にはこちらがあっと驚くような準備をしていたチームもあり（全員1年生の暫定最下位チーム）、そのチームを見た企業担当者も教員も喜んだ。

いったことの表れと考えられる。

事前→事中、事中→事後のいずれも基礎力の平均値は伸びているが、その値（伸び率）は事中→事後の方が圧倒的に高い点は注目に値する。事中の基礎力評価は、企業訪問インタビューが終わりホームページ原稿を出し終えたタイミングで実施したが、この翌週には提出されたホームページ原稿に対して順位づけを行ったことに加え、「ホームページの内容が教員の期待するレベルに遠く及ばない」旨の通告を行った。これは、順位が1位であったチームに対しても等しく行っており、前出の表にも記載した通りこの回より学生の主体性が目に見えて向上した。それまでは、受動的な態度で教室にいた学生も授業終了後自発的に教員にアドバイスを求めてくるようになるなど、教室の空気が一変した。教室がある種の「創発」状態に入ったかのようであった。このことから、否定を伴うことであるため慎重に行う必要はあるのはもちろんであるが、ある種の「ダメ出し」は履修生の主

体性向上に極めて有効であることが確認できた。

4.2 個別評価

個々人の指標の変化要因について、2人の学生に焦点をあてて授業時の観察や授業終了後の対話を通じて考察したい。

- ・学生A：当初、傾聴力1.0 という最低の診断値であったが、事後には4.7 にまで上昇した。チームでの作業を通じて人との関わりを意識しはじめた様子である。まだまだ、意識してやらないとできない状況はあるが、意識せずに傾聴するためには、今は意識してでもいいから体を向けて目を見て聞く姿勢を保っていきたいという意欲を持ち、継続して努力している。
- ・学生C：もともと好人物であるが、聞き役に回る事が多く自分の意見を言うことができていなかった。PBLではグ

表2 授業前後の社会人基礎力診断値変化

社会人基礎力		10月診断値 平均 (A)	12月診断値 平均	1月診断値 平均 (B)	平均値の伸び (B) - (A)	社会人基礎力診断値が 伸びた人数 (30名中)
アクション	主体性	5.05	5.29	6.29	1.24	23名 (76.6%)
	働きかけ力	4.80	5.13	6.36	1.56	27名 (90.0%)
	実行力	5.17	5.27	6.33	1.17	25名 (83.3%)
シンキング	課題発見力	4.86	4.98	5.86	1.00	22名 (73.3%)
	計画力	4.71	4.98	6.03	1.32	24名 (80.0%)
	創造力	4.30	4.68	5.70	1.39	22名 (73.3%)
チームワーク	発信力	4.64	5.08	6.09	1.45	25名 (83.3%)
	傾聴力	4.92	5.42	6.09	1.17	27名 (90.0%)
	柔軟性	5.14	5.26	6.19	1.05	25名 (83.3%)
	状況把握力	4.94	5.39	6.30	1.36	21名 (70.0%)
	規律性	4.79	5.42	6.45	1.67	20名 (66.6%)
	ストレスコントロール力	5.01	5.38	6.07	1.06	24名 (80.0%)

ループリーダーとなり苦労したが、それを乗り越えようとする経験を通じて、以前よりも意見を言うことができるようになった。さらにコミュニケーション能力と実行力を育むことが必要だということに気づき、新生児にパソコンを教えるアルバイトを始めた。

以上、二人の学生の例ではあるが、この授業をきっかけにして自分の今に気づき、何をすべきかを自分で考え行動をはじめている。個々の学生にとっては、成長の機会を得られていると言えるだろう。

4.3 企業の評価

この授業と一緒に取り組んだ企業の担当者にとっても、大学教育への参画は初めての経験であった。終了後の反省会・アンケート調査のなかで、学生たちの頑張りには一定の評価ができるものの、距離のとりかたについては、とまどいも見られた。代表的なコメントとして、以下のものがある。

- ・学生の質問に素直に答えてみたが、恐らくわかっていないであろうということがわかった。これをさらに深掘りしてほしいのだが、「深掘りしなさい」と言いすぎるとよくないのではないかと思ひ、どこまで導いていいかの線引きが難しかった。

- ・インタビューや電話での企業とのやり取りは、時間的にも制約が大きく、内容をつかむまでに至っていない様子がみられる。聞いた言葉をそのままホームページなどで伝達することはできるが、落とし込めていない。

指導アドバイスをするかどうかなど、学生との距離感については経験に基づく部分が多いものであるが、もともと経験のない(少ない)企業の方に協力をいただくのが産学連携授業である。基準をどのあたりに設定するかということは、企業の方との共同作業においては重要であることが確認された。

5. まとめと今後の課題

産学連携PBL授業として実施した「アクティブラーニング」では、多くの1年生たちと数名の2～4年生がチームを結成し、プロジェクト課題にのぞんだ。学生たちはとまどい悩みながらも、最終的にはすべてのチームがホームページを作成し、最終発表会では全協力企業の担当者が見守るなかで、立派に発表をしてこの授業を終えた。事実上4ヵ月という短い期間のなかで、試行錯誤で実施した新しいタイプの授業であったが、そのなかで学生たちは確実に成長したとの実感もっている。ここで身に付けた成長へのマインドと技術に磨きをかけて、いっそう充実した大学

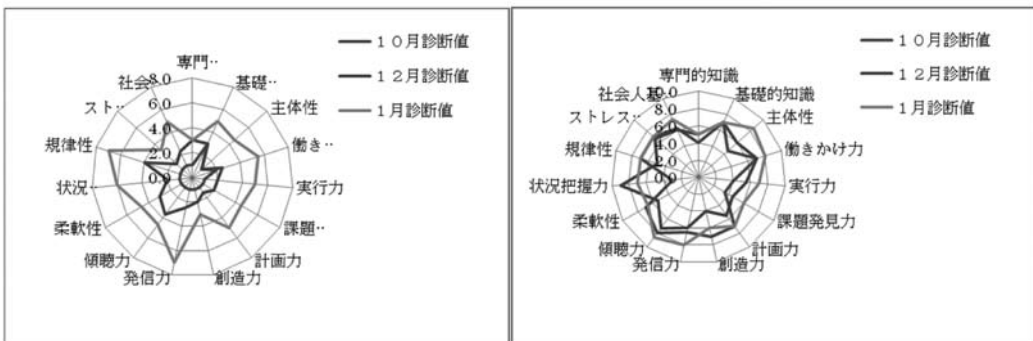


図3 学生の社会人基礎力診断値レーダーチャート (左：A, 右：C)

生活を送ってくれることを期待したい。

今回実施した産学連携PBL授業を通じて、いくつかの課題も浮上してきた。ここに整理することで、今後の教育改善に結び付けていきたいと考えている。

① 低学年PBLにおける課題の選定

今回のプロジェクトでは、履修生本人の成長意識を喚起するために、社会人の方と接する機会を設けた。そこで学生自身が「社会に出るにあたって身につけておくべき能力レベルを知り、自らの学生生活におけるゴールイメージを形成させること」を狙い、授業でもそのような指導を行った。また、そこ（ゴール）に至るために必要な「学生の間にしておくべきこと」への気づきを誘発する目的で、インタビューでは「働くこと」「社会に出ること」の意味を考えさせるような質問をするよう誘導した。

しかし、履修生の8割が入学したばかりの1年生という状況では、インタビューにおいて企業担当者の経験を踏まえた含蓄のある言葉を聞けたとしても、その意味を理解するだけの経験や素養の蓄積がなく、自分のものとして理解するところまで思考を深められていなかった。文中で述べた事中評価直後の「ダメ出し」にはこれに関する内容も含まれており、学生は学生なりに真剣に考え、改善を試みた。結果、当初原稿に比べればある程度の改善は見られたものの、それでも彼らが最終的にまとめあげた文章はこちらが期待した程には深まっておらず、取材で聞いたことの単なるコピーに近いものもあった。

このことを受けた反省点として、低学年の学生たちには、成長そのものを題材として思考を深めさせるには早すぎたと考えている。すなわち、彼らが持てる素養や経験から少しの背伸びで（もしくは少し入れ知恵をしてあげることで）専心して取り組むことのできる具体的な課題を設定することが何よりも大事

である。

② 学生の課題実施に向けての指導体制

課題プロジェクト開始後は、学生の日々の活動を把握することが難しくなる。本学は分離キャンパスであり、授業実施のキャンパスと授業の主担当者のキャンパスが離れていたため、履修生と日常的に顔を合わせる事ができず、学生の様子把握の困難さに拍車がかかった。

また、平成20年度の授業では、学生がこなすべきことが多すぎ（取材、HP原稿作成、評価を受けての作り変え、発表会資料作成、基礎力の自己評価3回、自己分析とマニフェストの作成2回など）、毎回の授業を落ち着いて実施できなかったきらいがある。次年度の授業ではこれを整理し、プログレスシートに記入させるなどによって活動状況と進捗を把握し、学生にとって無理のない形でプロジェクト進行が行われ、成長が誘導できるよう留意したい。

③ 他者からのフィードバック

この授業では、学生が行動し、もしくは何かをまとめ上げ提出した毎に必ず他者からのフィードバックが与えられるようにした。教員および企業担当者の「社会人」からのフィードバックは、直接的には学生の行為および出力に対して行われているが、学生と社会人では立ち位置も経験も大きく異なるため、学生はフィードバックされる言葉を通じて「社会人に対する相対的な自己の位置づけ」を意識せざるを得ない。その意味で協力企業の担当者（場面によっては教員も）は学生が自己を投影して自己を認識することのできる「鏡」としての役割も演じていることになる。注意しなければならないのは、この鏡は、学生の等身大の像を映さない場合もあるということである。

事中評価直後の否定的なフィードバックが

主体性向上に効果を発揮したことは文中で指摘したが、否定的なフィードバックは学生の状況をよく見たうえで実施する必要があることは言うまでもない。このことから、この種のプロジェクト型授業では、多人数を受け入れることは好ましいとは言えない。担当教員が個々の学生に目が行き届く規模で運営することが望ましいと言えるであろう。

(産学公連携・イノベーション推進機構

准教授)

(大学教育機構 学生支援センター 教授)

【謝辞】

本稿は、平成20年度経済産業省「体系的な社会人基礎力育成・評価システム構築事業」の成果に基づくものである。プロジェクトの機会をいただいた経済産業省ならびに数多くの示唆をいただいた同省の皆様には感謝申し上げます。また、授業の実施には、株式会社アクティブラーニング羽根拓也氏・加藤治人氏、ならびに協力企業の皆様には多大なご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

平尾元彦・藤井文武・宮崎結花「社会人基礎力の育成と自己目標管理－山口大学におけるCHECK-M

ANIFESTO-ACTION ループの試みー」、『大学教育』第7号, 2010, p35-46

大久保幸夫「キャリアデザイン入門(1) 基礎力編」, 日本経済新聞出版社, 2006

渡辺三枝子・平田史昭・田中勝男「人と組織を成長させるメンタリング入門(DVD編)」, 日本経済新聞出版社, 2008

Suan Imel, *Career Development for Meaningful Work Life*, ERIC Digest (edited by the Ohio State University), No. 237.

【注】

1) 経済産業省「体系的な社会人基礎力育成・評価システム構築事業」に山口大学が提案した「学部1年で着手しCHECK-MANIFESTO-ACTION ループで定着させる継続的な社会人基礎力の育成と評価」が採択され、平成20年度に取り組んだ。

2) 平尾・藤井・宮崎(2010) 参照

3) 山口大学「社会人基礎力の育成と評価」のホームページは以下のとおり公開されている。

<http://kisoryoku.sangaku.yamaguchi-u.ac.jp/>

平成20年度 経済産業省「体系的な社会人基礎力育成評価システム構築事業」
山口大学 学部1年で着手しCHECK-MANIFESTO-ACTION
ループで定着させる継続的な社会人基礎力の育成と評価

山口大学 | 新着情報 |

Home 卒業発表 進路資料 インタビュー記事 リンク

山口大学では、経済産業省「平成20年度体系的な社会人基礎力育成評価システム構築事業」にモデル大学の一つとして採択を頂き、現在各種の事業を実施しています。このホームページでは、当該事業に関する本学の取り組みを紹介します。

- 事業の概要
- 産学連携による社会人基礎力育成の基盤(課題「アクティブラーニング」)
- CHECK-MANIFESTO-ACTIONループによる社会人基礎力の継続的育成・評価(課題「キャリアと就業」「主観的育成とコミュニケーション」)

新着情報

機械工学科(生涯・ロボティクス専攻)受講生へ、2009年05月08日

産学連携によるプロジェクト選考で学生が作成したホームページ

 <p>山口県庁に学ぶ 社会人基礎力 アカデミア・センター</p>	 <p>ECOMASに学ぶ 社会人基礎力 アカデミア・センター</p>	 <p>学際連携に学ぶ 社会人基礎力 アカデミア・センター</p>	 <p>学際連携システムに学ぶ 社会人基礎力 アカデミア・センター</p>
 <p>KRYサービスステーション に学ぶ社会人基礎力 アカデミア・センター</p>	 <p>山口県庁に学ぶ 社会人基礎力 アカデミア・センター</p>	 <p>エルクホームに学ぶ 社会人基礎力 アカデミア・センター</p>	 <p>マツダに学ぶ 社会人基礎力 アカデミア・センター</p>

社会人基礎力
ポートフォリオ

山口大学学生・教職員限定

産学連携プロジェクト
選考協力企業(50音順)

宇部興産株式会社

uis
The Information Systems, Inc.
ECOMAS
エコマス株式会社

エルクホームズ

総合広告代理店
KRY SERVICE STATION
株式会社

マツダ株式会社

株式会社山口銀行

「社会人基礎力」について
(経産省発表)

インターネット 80%